

研究報告

青年期にある学生の死生観に関する研究の文献レビュー

A literature review of views on life and death among adolescent students

竹山 広美¹⁾, 岡光 京子²⁾

Hiromi Takeyama¹⁾, Kyoko Okamitsu²⁾

要 旨

研究目的は、青年期にある学生の死生観に関する研究の概要と死生観形成の影響要因について文献レビューを行い、死生観形成への支援の示唆を得ることである。2018年7月に医学中央雑誌 Web 版, CiNii から「死生観」, 「青年期」をキーワードに 26 件の論文を選択し, 分析した。結果, 死生観形成の影響要因は, ≪死に関する身近な経験≫ ≪疑似体験≫ ≪死生観に関する教育≫ など 5 カテゴリーが抽出された。核家族化している現代の青年期に死を身近に経験することは少ない。死生観形成への支援として疑似体験を含めた死生観に関する教育などが示唆された。

キーワード：死生観, 青年期, 死生観形成

Keywords: view on life and death, adolescence, formation of view on life and death

1) 広島国際大学看護学部 (Faculty of Nursing, Hiroshima International University)

2) 関西国際大学保健医療学部看護学科 (Department of Nursing, Faculty of Health Science, Kansai University of International Studies)

I. はじめに

医療の高度化、核家族化や女性の社会進出などから死亡場所が自宅から病院となり、死は身近なものではなくなっている。一方で15～39歳は自殺が死因1位であり（厚生労働省, 2017）、マスメディアやSNSからの情報やゲーム・アニメによる疑似的な死を体験する機会は増えている。命の大切さについての授業は道徳や総合的な学習の時間に行われてきているが、各学校に任せられている。

服部（2000, p.81）は、エリクソンのライフサイクルのV階層 *puberty and adolescence* の前半を身体的な成長及び二次性徴の発現を中心にとらえた思春期（12～18歳：中高生）、後半を心理・社会的な適応過程に重点に置く青年期（18～22歳）の2つに区分している。青年期の重要な発達課題は、アイデンティティを確立することであり、自分の生き方を定めることでもある（都筑, 2008, p.251）。今日、青年の中には社会に身を置くことから出発してアイデンティティ形成を行わないフリーターやニートと呼ばれる者など自己探求の作業は非常に複雑になっている（溝上, 2005, p.51）。

これまで死生観に関する尺度は、Templer, D. I. (1970) の *Death Anxiety Scale (DAS)* や Gesser, G. et al (1987) の *Death Attitude Profile (DAP)*、日本では、丹下（1999）の青年期を対象とした死に対する態度尺度や平井ら（2000）の臨老式死生観尺度などが開発され、高齢者や医療従事者などを対象に多くの研究がなされてきた。

死生観には宗教や文化が大きく影響を与え、日本人の死生観は神道、仏教、儒教などの影響を受け、複合的に形成されている。青年期の中でも医療従事者を目指す学生は、講義や臨地実習などを通して死生観を考える機会は多い。死生観を考えることは、医療従事者の今後のケア

の質の向上だけでなく、自分自身の人生を振り返り、今後の生き方を改めて考える機会になると考える。また、先を見据え、適切な時期に家族など近親者と治療や療養場所に関する意思決定について話す機会を持つことは、最期まで自分らしく生きることに繋がると考える。

本研究の目的は、日本人の青年期の死生観に関する研究の概要と死生観形成の影響要因について文献レビューを行い、死生観形成への支援の示唆を得ることである。

II. 用語の定義

1. 死生観とは、生きること、死に対する個人の考え方のことである。

III. 研究方法

1. 対象論文

青年期にある学生の死生観に関する論文について、医学中央雑誌 Web 版、国立情報学研究所ナビゲータ CiNii をデータベースで会議録を除く原著論文とし、2005年から2018年7月までの論文を対象に「死生観」、「青年期」をキーワードに検索した。結果、医学中央雑誌 Web 版 174 件、CiNii 17 件がヒットした。その中から死生観に関する尺度を一部のみ使用しているもの、研究方法や結果が省略された日本看護協会論文集を除き、本研究の対象となる青年期にある学生の死生観に関する論文 26 件を選択した。

2. 分析方法

研究の概要は、研究の年次別論文数、研究の種類、研究デザイン、研究方法（使用している尺度）、対象者の項目とした。また、研究目的は、目的の類似性に従って分類した。死生観形成の影響要因は、研究内容から死生観形成の影響要因を抽出し、意味内容の類似性に従ってサブカ

テゴリ化, さらにカテゴリ化した.

3. 分析の信頼性の確保

分析結果の信頼性は, 共同研究者と検討を行い, その確保に努めた. 研究者間で判断が困難な場合には, 繰り返し討議を行い, 検討を重ね決定した.

IV. 結果

1. 研究の概要 (表 1・2)

年次別論文数は, 1~4件で2006・2007・2012年の4件が最も多かった. 研究方法は, 量的研究25件, 質的研究1件であり, 量的研究が多かった. 研究デザインは, 関係探索研究25件であり, 死生観に関する尺度を使用しているものが多く, 平井ら(2000)の「臨老式死生観尺度」13件, 丹下(1999)の「青年期における死に対する態度尺度」3件の順であった. 対象者は, 青年期にある医療系の大学生・専門学校生20件が最も多かった.

研究目的は, 【死生観に関する意識】, 世代間や医療系と医療系以外の学生の【死生観の比較】, 【死生観形成の影響要因】, アイデンティティ・人生観など【死生観との関連】, 医療系の学生を対象に行われていた【死生観に関する教育の影響】に分類された.

2. 青年期にある学生の死生観形成の影響要因

対象となった26件の研究内容から死生観形成の影響要因は, 表3に示すように「死に関する身近な経験」, 「死を意識する経験」, 「疑似体験」, 「宗教」, 「死生観に関する教育」の5カテゴリと13サブカテゴリが抽出された. 以下, カテゴリを「」, サブカテゴリを「<>」として分析結果を述べる.

1) 死に関する身近な経験

「死に関する身近な経験」には, 家族など身

近な人やペット, 受け持ち患者との「死別体験」, 「臨終に立ち会う・看取り体験」, 「葬儀への参列」の3つのサブカテゴリが含まれていた.

田代ら(2006), 園田ら(2007)の死別体験のない学生は「死からの回避」が有意に高かったが, 小林ら(2010)や加藤ら(2009)は死別体験による差は認められなかった. 糸島(2005)の死別体験のある大学生は, 「不死感・死後の世界」の得点が高かったが, 看護学生は, 死別経験の有無に有意差はなかった. 園田ら(2007)の看取り体験のある学生は, 「死への恐怖・不安」が有意に高かったが, 瀧川ら(2012)の死別体験があり, 臨終の場面に立ち会った学生は「死への恐怖」の得点が有意に低かった. 園田ら(2007)の葬儀参列体験のない学生は「死への関心」が有意に高かった. 遠藤ら(2014)の歯科大学生は死別体験あり群が有意に「死への意識」, 「家族の余命」, 「臓器提供」, 「延命措置」, 「死への不安」を考えていた.

2) 死を意識する経験

「死を意識する経験」には, 「家族の死を意識した経験」, 「家族の病気」, 「自分の病気・入院経験」の3つのサブカテゴリが含まれていた.

瀧川ら(2012)の入院経験がある学生は「死への恐怖」の得点が有意に低く, 核家族世帯で育った学生の方が死を回避的受容し, 死を生への諦めや回避とみなす傾向があった. 田代ら(2006a)の看護学生は「自分の病気」よりも「家族の病気」から死生観に影響を受けていた. また, 富松ら(2012)の死を身近に感じていない群の学生は, 死を身近に感じている群よりも死を恐れていた.

3) 疑似体験

「疑似体験」には, テレビ・映画などの「マスメディア」, 「読書」の2つのサブカテゴリ

表 1. 青年期にある学生の死生観に関する研究の概要

n=26

項目	内 訳	数	%
年次別	2018 年	1	3.8
	2017 年	3	11.5
	2016 年	1	3.8
	2015 年	1	3.8
	2014 年	1	3.8
	2013 年	3	11.5
	2012 年	4	15.4
	2011 年	0	0.0
	2010 年	1	3.8
	2009 年	1	3.8
	2008 年	1	3.8
	2007 年	4	15.4
	2006 年	4	15.4
	2005 年	1	3.8
研究の種類	質的研究	1	3.8
	量的研究	25	96.2
研究デザイン	因子探索研究	1	3.8
	関係探索研究	25	96.2
研究方法：尺度 (重複回答 n=29)	丹下「青年期における死に対する態度尺度」	3	10.3
	平井ら「臨老式死生観尺度」	13	44.8
	小松「死生観尺度」	1	3.4
	岡本ら「死生観尺度」	1	3.4
	横山「日本人高齢者死生観尺度」	1	3.4
	Hardt,D. V.「死に対する態度尺度日本語版」	1	3.4
	Osgood,C.E. et al「SD 法（死のイメージ尺度）日本語版」	1	3.4
	Frommelt,K,H.「ターミナルケア態度尺度日本語版」	1	3.4
	使用なし	7	24.1
対象者 (重複回答 n=32)	医療・福祉系以外の学生（大学生：9，短期大学生：1，専門学校生：1）	11	34.4
	医療系学生（医学生：2，歯科学生：1，作業・理学療法専攻：2，検査 学科・放射線技術学科・臨床工学科：2，看護学科：11， 看護短期大学生：1，看護専門学校生：1）	20	62.5
	福祉学科大学生	1	3.1

表 2. 青年期にある学生の死生観に関する研究目的の分類

著者（発行年）	研究目的	分類
遠藤ら（2014）	歯科大学生の死生観に関する意識	死生観に関する意識
内山ら（2013）	看護大学生の臨地実習前の死生観	
眞鍋ら（2017）	看護大学生と社会人の上映前後の死生観の比較	死生観の比較
久木原ら（2013a）	看護大学生と医療系学生の死生観の比較	
富松ら（2012）	死生観の世代間（大学生と中年群，老年群）の比較	
渡辺ら（2008）	介護学生とケアワーカーの死生観の比較	
田代ら（2006a）	看護大学生の死生観の学年間の比較	
田代ら（2006b）	日韓看護大学生の死生観の比較	
久木原ら（2013b）	医療系大学生の死生観と関連因子	死生観形成の影響要因
瀧川ら（2012）	看護大学生と大学生の死生観形成	
加藤ら（2009）	看護専門学校生の死生観や終末期ケアの考え方と死生観の影響因子	
月田ら（2006）	看護大学生の死生観に影響する因子と臓器移植に対する意識・脳死の捉え方	
糸島（2005）	看護大学生と他学部生の死生観形成	
野田ら（2018）	青年期の死生観と体験の回避，自尊感情の関係	死生観との関連
福田ら（2017）	女子大学生の自傷行為に対する意識と死生観の関連	
金山ら（2016）	作業療法・理学療法専攻学生のアイデンティと死生観の関係	
望木ら（2015）	医学科学生の生命倫理観と死生観の関係	
大石ら（2012）	大学生の首尾一貫感覚（SOC）と死生観の関連	
森田（2007）	大学生の死生観とアイデンティティ，ストレス，コーピングとの関連	
大石ら（2007）	大学生の生きがい感（PILテスト）と死生観の関連	
石坂（2006）	青年期の死生観と人生観の関連	
針替ら（2017）	作業療法専攻学生の死生観教育前後の死生観の比較	死生観に関する教育の影響
園田ら（2012）	看護大学生の終末期・死に関する講義・実習の前後の死生観の変化	
小林ら（2010）	看護大学生エンゼルメイクの講義・演習前後の死生観の変化	
平川ら（2007）	医学生を終末期医療・看護に関する授業を受けた経験と死生観との関連	
園田ら（2007）	看護学生のターミナルケアの授業前後の死生観の変化	

表 3. 青年期にある学生の死生観形成の影響要因

カテゴリ	サブカテゴリ
死に関する身近な経験	死別経験（身近な人・ペット・受け持ち患者）
	看取り体験・臨終に立ち会う
	葬儀への参列
死を意識する経験	家族の死を意識した経験
	家族の病気
	自分の病気・入院経験
疑似体験	マスメディア（テレビ・映画）
	読書（文学・教育・医学・科学）
宗教	信仰
	神社への参拝
死生観に関する教育	入学前の終末期・死に関する学習の経験
	死生観に関する講義
	臨地実習

が含まれていた。

眞鍋ら（2017）の映画視聴後の看護学生は、「死について学ぶこと・教育は必要である」、「死は人間にとって必要なものである」が有意に高い値であった。また、「終末期にある身近な人の家族と接することは、生と死を考える機会となる」、「家族や親しい人が亡くなった後でも自分の心の中に生き続けると思う」が高い値であった。糸島（2005）の看護大学生は「医学・科学」、「闘病記」、「看護」から影響を受け、他学部の大学生は「文学」、「教育」の影響を受けていた。

4) 宗教

《宗教》には、＜信仰＞、＜神社への参拝＞の2つのサブカテゴリが含まれていた。

小林ら（2010）の信仰がある看護学生は、「寿命観」が有意に高くなっていたが、富松（2012）の大学生や加藤ら（2009）の看護学生は、信仰している宗教の有無によって有意差は認められなかった。久木原ら（2013b）の医療系学生

の神社への参拝する群の「死への関心」と参拝しない群の「解放としての死」が有意に高く、神社の参拝をしない群は「死からの回避」が高い傾向があった。

5) 死生観に関する教育

《死生観に関する教育》には、＜入学前の終末期・死に関する学習の経験＞、＜死生観に関する講義＞、＜臨地実習＞の3つのサブカテゴリが含まれていた。

小林ら（2010）の臨地実習やターミナルケアの講義を受けた学生は、「開放としての死」と「死への関心」が有意に高かった。園田ら（2007, 2012）の看護学生は、講義や実習後に「死への恐怖・不安」が有意に低下していた。しかし、授業を受けた医学生（平川ら, 2007）と作業療法学生（針替ら, 2017）は、「死への恐怖・不安」の得点が高く、医学生は、「死への関心」の得点が高い傾向にあった。園田ら（2007, 2012）の看護学生は、講義や実習後に自分の死について考える頻度が増加し、園田ら

(2012)の看護学生は、講義・実習終了後に死のイメージが肯定的になっていた。看護学生(園田ら, 2007; 園田ら, 2012)と作業療法学生(針替ら, 2017)の死生観に関する教育後の「人生における目的意識」は有意に高く、作業療法学生は死生観に関する教育後に「寿命観」が有意に高くなっていた。

V. 考察

1. 青年期にある学生の死生観に関する研究の概要

青年期にある学生の死生観の本研究に該当した26件の内、20件は医療系の大学生と専門学校生を対象としていた。生死に関わる医療系の学生は、死生観を自己認識する必要性などが論文数に影響していると考えられる。研究デザインは、関係探索研究がほとんどであり、平井ら(2000)の死生観に関する尺度が開発されたことなどが影響していると考えられる。

研究目的は、【死生観に関する意識】、【死生観の比較】、【死生観形成の影響要因】、【死生観との関連】、【死生観に関する教育の影響】であった。【死生観との関連】では、アイデンティティ、自殺・自傷行為など青年期の発達課題や現状に関連している研究がされていた。しかし、青年期に死生観について考える機会の現状や、死生観形成の与える影響については研究されていなかった。

2. 青年期にある学生の死生観形成の影響要因

死生観形成の影響要因は、身近な人との<死別体験>、テレビ・映画などの<マスメディア>などであり、医療系の学生は<死生観に関する講義>や<臨地実習>も影響していた。河村(2016)の近親者との死別体験をした高齢者を対象にした研究では、死別体験をしたことで「死」を自分のこととして現実的に捉え、自分

自身の「生き方」について考える機会となり、「宗教」に親和性のある関わりの変化があったことを報告している。核家族化している現代の青年期にとって死はゲームやアニメ、テレビで頻繁に目にしているが、現実生活での経験は少ない。しかし、医療系の学生は死別体験の有無に関係なく、講義や臨地実習など生死について身近に考える機会が多い。瀧川ら(2012)の核家族世帯で育った学生の方が死を生への諦めや回避とみなす傾向があった。三世代以上の家族は、死別経験でなくとも病気や加齢現象など死を身近に感じる状況があり、家族構成は《死を意識する経験》に繋がると考える。田代ら(2006a)の看護学生は、「自分の病気」よりも「家族の病気」から死生観に影響を受けていた。青年期は、生命に関わる重大な病気に罹患することが少ないこともあり、家族など重要他者の病気や入院による環境や役割の変化などが影響していると考えられる。

眞鍋ら(2017)の映画視聴後の看護学生は、「死について学ぶこと・教育は必要である」、「死は人間にとって必要なものである」が有意に高かった。突発的に災害をもたらす自然条件や仏教・神道と祖先の祭り、儒教と武士道などの文化的背景は、日本人の死生観に強い影響を与えてきた(石丸, 2014, p41)。青年期は特定の宗教に自覚的に関わる人や日々の生活で意識することが少ないが、身近な経験だけでなく、マスメディアからの情報や映画などは、これまで経験していない状況や個々の考え方を知る機会になると考える。

園田ら(2007, 2012)の看護学生は、講義や実習後に自分の死について考える頻度が増加し、園田ら(2012)の看護学生は、講義・実習終了後に死のイメージが肯定的になっていた。死生観に関する授業や臨地実習は、患者に対してだけでなく、自分の生死について考える

機会になり、死生観に影響を与えることが考えられる。看護学生（園田ら，2007；園田ら，2012）と作業療法学生（針替ら，2017）は死生観に関する教育後に「人生における目的意識」が有意に高くなっていた。青年期は、個人固有の特徴や予想される将来の目標、自分自身の運命を統制する力に気づき、現在の自分が何であるか、将来の自分が何でありたいか等を決めたいと思うようになる（服部，2000，p.85）。石坂（2006）は、死に関する模索は死生観のみならず人生観にも、自分の生き方に関する思索は人生観のみならず死生観にも影響を及ぼすと述べている。医療系の学生は、入学時から卒業後の職種など将来像を描いている学生が多いが、医療系以外の学生にとっても生死について考えることは、これからの人生の目的意識をもつことに繋がると考える。

3. 青年期にある学生の死生観形成への支援

2の考察から、青年期にある学生の死生観形成には、宗教・身近な人の死や死を意識する個人的な経験と疑似体験・死生観に関する教育などが影響していることが明らかになった。

糸島（2005）の看護大学生は「医学・科学」、「闘病記」、「看護」から死生観の影響を受け、他学部的大学生は「文学」、「教育」の影響を受けていた。死生観は、臓器移植などの医療倫理、生命倫理にも関わりがあり、死を扱う現場で働くこととなる医療系の学生にとって必要不可欠である。講義や臨地実習では、学生との対話を大切にリフレクションし、学生自身や周囲の経験も含めた気づきや考えを学生間で共有することが死生観形成に繋がると考える。

死生観について考えることは、自己のアイデンティティを確認する作業と関わっている（石丸，2018，p.54）。医療系の学生に限らず、社会人の前段階である青年期に死生観を改めて考

えることは重要である。文学作品は死生観を生み出す様式の主なテーマが見いだされ、死生観の表出として読むことができるものが少なくない（島菌，2012，p.14-15）。経験しなくても疑似体験できる文学作品や映画など効果的な教材を検討する必要がある。

VI. 結論

青年期にある学生の死生観に関する研究の対象者は、医療系の大学生・専門学校生 20 件が最も多かった。研究目的は、【死生観に関する意識】、【死生観の比較】、【死生観形成の影響要因】、【死生観との関連】、【死生観に関する教育の影響】であった。死生観形成の影響要因は、《死に関する身近な経験》、《死を意識する経験》、《疑似体験》、《宗教》、《死生観に関する教育》の 5 カテゴリーと 13 サブカテゴリーが抽出された。核家族化している現代の青年期に現実生活で死を身近に経験することは少ない。死生観形成への支援としては、疑似体験を含めた死生観に関する教育などの重要性が示唆された。

VII. 本研究の限界と課題

青年期の死生観に関する研究の概要と死生観形成の影響要因について文献レビューを行った。本研究は、大学や専門学校で様々な教育を受けている学生を対象としている文献研究であったため、死生観形成の影響要因が限定されていることが考えられる。

今後、対象者や研究方法を検討し、死生観形成の影響要因を明らかにしたうえで対象者に合わせた死生観形成への支援をする必要がある。

文献

福田雄一，仲嶺彩花（2017）. 女子大学生の自傷行為に対する意識と死生観の関連，広島文

- 教女子大学心理学研究, 4(1), 61-67.
- Gesser, G., Wong, P. T., Reker, G. T. (1987-1988). Death attitudes across the life-span: The development and validation of the Death Attitude Profile (DAP), *Omega: Journal of Death and Dying*, 18(2), 113-128.
- 針替明世, 藤原健一, 岸育映, 他 (2017). 作業療法学生に対する死生観教育の効果検証, 弘前医療福祉大学紀要, 8(1), 31-38.
- 服部祥子 (2000). 生涯人間発達論人間への深い理解と愛情を育むために, 医学書院, 東京.
- 平井啓, 坂口幸弘, 安部幸志, 他 (2000). 死生観に関する研究—死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証—, *死の臨床*, 23(1), 71-76.
- 平川仁尚, 益田雄一郎, 葛谷雅文, 他 (2007). 終末期医療・看護に関する授業と医学生の死生観との関係, *日本老年医学会雑誌*, 44(2), 247-250.
- 石丸昌彦 (2018). 日本人の死生観, 石丸昌彦, 山崎浩司 (編), *死生学のフィールド*, 47-68, 放送大学教育振興会, 東京.
- 石丸昌彦 (2014). 日本人の死生観, 石丸昌彦 (編), *死生学入門*, 41-60, 放送大学教育振興会, 東京.
- 石坂昌子 (2006). 青年期における死生観と人生観の関連, *臨床死生学*, 11, 34-42.
- 糸島陽子 (2005). 死生観形成に関する調査—看護学生と大学生の比較—, *京都市立看護短期大学紀要*, 30, 141-147.
- 金山祐里, 土屋景子, 小野健一 (2016). リハビリテーションを学ぶ大学生のアイデンティティと死生観に関する研究, *作業療法*, 35, 445-448.
- 加藤和子, 百瀬由美子 (2009). 看護学教育における看護学生の死生観に関する研究, *愛知県立大学看護学部紀要*, 15, 79-86.
- 河村諒, 中里和弘 (2016). 近親者と死別した高齢者の悲嘆に関連する死生観についての検討, *Hospice and Home Care*, 24(1), 24-31.
- 小林祐子, 和田由紀子, 若林理恵子, 他 (2010). ターミナルケア授業にエンゼルメイク演習を取り入れた試み, *Hospice and Home Care*, 18(1), 23-30.
- 厚生労働省 (2017). 平成28年人口動態統計月報年計の概況, 2018年9月1日引用, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai16/dl/gaikyou28.pdf>.
- 久木原博子, 内山久美, 浅田有希, 他 (2013). 看護学生と医療系学生の死生観比較, *インターナショナル Nursing Care Research*, 12(3), 94-99.
- 久木原博子, 内山久美, 原理恵, 他 (2013). 医療系大学生の死生観と関連因子の検討, *看護・保健科学研究誌*, 14(1), 125-131.
- 眞鍋知子, 天谷尚子, 陳俊霞, 他 (2017). 看護学生と社会人の死生観の比較, *了徳寺大学研究紀要*, 11, 87-96.
- 溝上慎一 (2005). アイデンティティと発達: 社会に身をおいて自分であるということ, 麻生武, 浜田寿美男 (編), *やわらかアカデミズム・<わかる>シリーズよくわかる臨床発達心理学*, 50-51, ミネルヴァ書房, 京都.
- 望木郁代, 桑畑綾香, 白石奏三, 他 (2015). 医学科学生における生命倫理観と死生観, *46(4)*, 355-363.
- 森田真季 (2007). 死生観とアイデンティティ, ストレッサー, コーピングとの関連—大学生を対象に—, *Journal of Japanese Clinical Psychology*, 25(5), 505-515.
- 野田昇太, 城月健太郎 (2018). 青年期の死生観と体験の回避, 自尊感情の関係性, *認知療法研究*, 11(1), 72-79.

- 大石和男, 遠藤伸太郎 (2012). 大学生の首尾一貫感覚 (SOC) と死生観の関連性について, *トランスパーソナル心理学/精神医学*, 11(2), 69-79.
- 大石和男, 安川通雄, 濁川孝志, 他 (2007). 大学生における生きがい感と死生観の関係 - PILテストと死生観の関連性, *The Japanese Journal of Health Psychology*, 20(2), 1-9.
- 島菌進 (2012). 日本人の死生観を読む, 朝日新聞出版社, 東京.
- 園田麻利子, 上原充世 (2012). 看護学生の「生と死」に対する考え方の推移, *鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要*, 16, 13-21.
- 園田麻利子, 上原充世 (2007). ターミナルケアの授業における学生の死生観に関する検討, *鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要*, 11, 21-35.
- 瀧川薫, 田中美智 (2012). 大学生の死生観形成について - 看護学生と他学部生との比較 -, *滋賀医科大学看護学ジャーナル*, 10(1), 16-21.
- 丹下智香子 (1999). 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討, *心理学研究*, 70(4), 327-332.
- 田代隆良, 出田順子, 永田奏, 他 (2006). 日韓看護学生の死生観の比較, *保健学研究*, 19(1), 49-54.
- 田代隆良, 永田奏, 出田順子, 他 (2006). 看護学生の死生観の学年間比較, *保健学研究*, 19(1), 43-48.
- Templer, D. I. (1970). The construction and validation of a death anxiety scale, *Journal of General Psychology*, 82(2), 165-177.
- 富松梨花子, 稲谷ふみ枝 (2012). 死生観の世代間研究, *久留米大学心理学研究*, 11, 45-54.
- 月田桂寿美, 池田歩未, 藤井和代 (2006). 看護学生の死生観に影響する要因と脳死の捉え方, *福井大学医学部研究雑誌*, 7(1-2), 7-13.
- 都筑学 (2008). 青年は未来に向かって生きている, 都筑学 (編), やさしい発達心理学乳児から青年までの発達プロセス, 247-261, ナカニシヤ出版, 京都.
- 内山久美, 久木原博子, 二重作清子, 他 (2013). 看護大学生の臨地実習前の死生観, *看護・保健科学研究誌*, 13(1), 104-113.